

序 文

暇を持て余していた1985年の夏休み（私は1986年卒業ですので、大学5年生の夏休みということになります）に、私の叔父で当時岸和田徳洲会病院病院長の廣岡^{たかし}大司先生から病院見学に誘われました。たしか、“旨いもんも食べさせるし、若くて可愛い看護婦さんいっぱいおるよ”と言われた記憶があります（これは、私の思い込みかも知れません）。今の医学部生とは違って、部活（ちなみに医学部硬式野球部で投手をしていました。勝ち星は聞かないのがお約束です）が無ければ何もすることが無いので（本当はそんなことはなく、夏休み中基礎教室で実験し一流英文雑誌に投稿し掲載されていた仲間もいました）、喜び勇んで一週間を岸和田徳洲会病院で過ごしました。確かに、毎日業務が終わると美味しいものを食べさせていただきました。時々若くて可愛い看護婦さんもありました。しかし、業務が終わるのが何時なのかわからないのです。区切りというものがありませんでした。先生方はいつ休んでおられるのか、わかりません。病院についたその日の医局で見た光景は凄まじく、爆眠している医師が医局で何名かいるだけでした。自分はいったいどこに行ったらよいのだろうと焦り、取り敢えず救急外来へ行きました。そこで、初めて叔父に合うことができ、叔父と楽しそうに話をしている湯浅 肇先生とお会いしたのです。お二人は、経腹壁超音波検査で虫垂炎の診断をしておられたのです。病歴聴取、腹部触診、即超音波検査です。その後、付け足しで採血と腹部単純レントゲンくらいは撮っておられました。そして、急性虫垂炎と診断して手術という流れでした。私はこのような体験を通じて超音波と出会ったのです。そして、今もお超音波とともにいます。

今回の特集の企画は本誌編集委員の名古屋大学消化器内科 藤城光弘教授から頂戴しました。私は超音波と内視鏡を生業にする消化器内科医です。藤城教授はそこに目をつけ、私にお任せいただいたのだと思います。このような大役を与えていただきました藤城教授にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

腹部超音波診療といっても多岐にわたります。そのうえ、“これ一冊ですべてわかる”冊子にする必要がありました。当然、基本的なことから最新の知見まで織り交ぜ、超音波に携わる医師や技師すべてにとって常に携行していただけるものを目指す必要がありました。

撮像方法の基礎・肝臓領域・胆膵領域・消化管領域・救急領域の基礎から最新の知見までを網羅することが必要でした。胆膵領域と消化管領域では経腹壁超音

波だけではなく、超音波内視鏡も重要な役割を担います。さらに、日本超音波医学会が現在取り組んでおります“超音波と AI”についても取りあげることができました。“超音波と AI”の頁の共著者には、工藤正俊 前日本超音波医学会理事長と椎名 毅 現理事長のお名前があり、今後の超音波領域の方向性を示しているように思われます。

手前味噌を並べることになるかと思いますが、できあがった原稿をすべて拝読し、当初考えていた内容の多くは達成できたのではないかと自負しております。本誌を通読していただければ、腹部超音波の基礎から最新の話題まで知ることができると思います。先生方が超音波検査を行うときに、本号が座右の書となることを願って止みません。

最後になりますが、ここまでお付き合いいただきました編集委員会の先生方、各専門領域において中心的役割をお引き受けいただいた先生方、日本メディカルセンター編集室の皆様、そして何よりもこの企画の遂行を支えて頂きました本学消化器内科の仲間たちに心からお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

2020 年 8 月

藤田医科大学消化器内科学講座 II

廣岡 芳樹